2020年8月

①

「孟子」一日一言

吉田松陰が選んだ「孟子」の言葉

川口雅昭＝編

（致知出版社）

致知一日一言シリーズ⑲

孟子（もうし）
紀元前372～289年頃
邹（現・山東省）の人。姓は孟、名は軻。字は子輿。亜聖とも称される。孔子の孫である子思の門人に学ぶ。孔子の仁の徳に基づく徳治主義を継いで諸国を遊説したが用いられず、退居して教授と著述に専念。その弟子たちとの言行が『孟子』（7篇）に記録されている。自給自足の衣食住の確保、井田法の施行、自由関税などにより人民の恒産を安定させたうえで、教育を普及して道徳国家を実現するという理想を掲げた。礼を父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫とし、人間の本性を性善説で把握、覇道を排し、王道による天下統一を説いた。また、すべての人間は道徳の価値を主体的に判断し、実行する善なる性（本心、良知良能）を先天的に備えているという性善説を唱えた。その思想は宋代の朱子学によって高い評価を受け、『孟子』は『論語』と並び称され、孔孟の道は儒教の代名詞となった。

吉田松陰（よしだ・しょういん）
1830～1859（天保1～安政6）年
長門国（山口県）萩松本村の生まれ。萩藩士杉百合之助の次男。名は矩方（のりかた）。通称・寅次郎。松陰は号。5歳の時、山鹿流兵学師範の叔父吉田大助の養子となり、10歳で藩主毛利敬親の御前で山鹿流兵学を講じた。その後、藩校明倫館の兵学教授として出仕。嘉永3（1850）年、21歳の時に長崎平戸へ、翌年藩主の参勤交代にしたがって江戸へ遊学した。佐久間象山に蘭学を学び、日本の改革に目覚める。嘉永6（1853）年、ペリー艦隊来航に危機感を覚え、志士的活動を開始。翌安政元（1854）年、下田事件をおこし、失敗。自首して、江戸伝馬町獄に収監された。その後、幕府より「在所蟄居」の判決を受けたが、萩の野山獄に収監される。野山獄で、同囚と『孟子』の輪読会を開始、出獄後も継承し、『講孟劄記』となる。その後、叔父玉木文之進のおこした松下村塾の三代目主宰者となり、高杉晋作や久坂玄瑞などを育てた。後、老中間部詮勝の暗殺などを策したとして野山獄に再収監され、幕命により江戸に送られ伝馬町に入獄。安政6（1859）年10月27日、斬首刑に処せられた。

1月

1日 大丈夫

天下の広居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行き、志を得れば民と之れに由り、志を得ざれば独り其の道を行ふ。富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はず。此れを之れ大丈夫と謂ふ*。

（藤文公下二章）

【訳】（真に立派な男児とは）慈しみにあふれる広い心をもち、正しい規範に立ち、道理にかなう生き方をするものである。志がかなって、一定の地位に登用されれば、天下の人民とこの正しい生き方を行い、志がかなわなければ、自分一人でこの生き方を行う。どんな富や高い地位で誘惑しても、その心を動かすことはできない。どんなに貧乏で低い地位にあっても、その志を変えさせることはできない。どんな権威や武力で圧迫しても、その志をまげさせることはできない。このような人を立派な男児という。

（講談社学術文庫 442 443）
『講孟劄記』（上）吉田松陰
『講孟劄記』（下）近藤啓吾 全訳注
（岩波文庫 33-021-1）
『講孟余話』吉田松陰著 広瀬豊 校訂

1月18日 恒の産なくして恒の心ある者は

恒の産なくして恒の心ある者は、惟だ士のみ能くすと為す。

（梁恵王上七章）

【訳】一定の収入がなくても、常に道を守り抜く心をもち続けられる者は、ただ学問修養のできた人物だけである。

○松陰は、「この一句で、武士たる者のあり方を認識せよ。『武士は食はねど高楊枝』という諺があるが、同じ意味である。これは武士への教訓ではなく、武士たる者の姿である。武士というものは、飢えても凍えても、自分は武士であるという自覚を失わないものだということはいうまでもない」と記している。

2月

7日 千万人と雖も吾れ往かん

自ら反みて縮からば、千万人と雖も吾れ往かん*。

（公孫丑上二章）

【訳】自分で己を振り返ってみて正しいと思えば、相手がたとえ千万人の大敵であっても、私は恐れずに進むであろう。

○松陰は、「このような人が国に一人いれば、国中の気が盛んとなり、弱い国も転じて強国となるものである。ましてや、このような人物を登用して大将とすれば、味方が奮い立つことはもちろんである。強将のもとには、弱兵はいない。武士たる者は、このような勇気の修養に志さねばならない」と記している。

2月

8日 志は気の帥なり

夫れ志は気の帥なり。気は体の充なり。夫れ志至れば気次ぐ*。

（公孫丑上二章）

【訳】志は気力を左右するものである。また、気力は肉体に充ちるものである。だから、志がしっかりと確立すれば、気力はそれにつき従ってくるものである。

○松陰は、「学問の上で大いに忘むべきことは、やったりやらなかったりである。やったりやらなかったりでは、物事が成就することはない。東の間もこの志をいい加減にしないことを、その志を持するという」と記している。

2月

9日 浩然の気

我れ善く吾が浩然の気を養ふ。（中略）其の気たるや至大至剛、直を以て養ひて害することなければ、則ち天地の間に塞がる。

（公孫丑上二章）

【訳】 私は浩然の気をよく養っている。（中略）この気は、この上もなく大きく、この上もなく強いものである。正しいやり方でこれを養い、害することがなければ、天地間に充満するほどにもなる。

○松陰は、「浩然の気は本来天地間に満ちあふれており、人はそれを得て自分の気としている。私心を除けば、この気は更に至大となり、天地の気と一体になる」と記している。

2月

20日 惻隱・羞悪・辞譲・是非の心 ①

惻隱の心は仁の端なり。羞悪の心は義の端なり。辞譲の心は礼の端なり。是非の心は智の端なり。人の是の四端あるや、猶ほ其の四端あるがごときなり。是の四端ありて自ら能はずと謂ふ者は、自ら賊ふ者なり。其の君能はずと謂ふ者は、其の君を賊ふ者なり。

（公孫丑上六章）

【訳】 憐れみの心は仁の芽生えである。悪を恥じ、にくむ心は義の芽生えである。譲り合う心は礼の芽生えである。善し悪しを見分ける心は智の芽生えである。人間にこの仁義礼智の芽生えが生来備わっていることは、ちょうど四本の手足が生まれながらに備わっていることと同じである。それなのに、自分にはとても（仁義礼智という）立派なことはできそうにないと、最初からあきらめるのは、己を見くびる者というものである。また、我が主君にはとても立派な政治など思いもよらないこととして、最初から（よき仁政を）お勧めしようともしないのは、主君を見くびる者というものである。

3月

22日 教ふるに人倫を以て

人の道あるや、飽食暖衣、逸居して教なければ、則ち禽獣に近し。聖人之れを憂ふるあり、契をして司徒たらしめ教ふるに人倫を以てして、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり。

（滕文公上四章）

【訳】 人は衣食が足り、怠けて教育を受けないと、全く鳥や獣のようになってしまう。聖人はこれを心配して、（舜の家臣）契を教育担当の役人とし、人々に人の道を教えさせた。（こうして）父子には親愛、君臣には礼儀、夫婦には区別、長幼には順序、親友の間には信義があるというようになった。

2月

21日 惻隱・羞悪・辞譲・是非の心 ②

凡そ我れに四端ある者は、皆拡めて之れを充たすことを知る。火の始めて燃え、泉の始めて達するが若し。苟も能く之れを充たさば、以て四海を保んずるに足り、苟も之れを充たさざれば、以て父母に事ふるにも足らず。

（公孫丑上六章）

【訳】 大体、人間たる者で、この四つの芽生えが生来的に己に備わっていることを自覚している者は、これらを育て上げ、更に立派なものとすれば、（これらは）いくらでも大きなものとなることを知っている。それは火が燃え始めると、どんどん燃え広がり、泉が湧き始めると、どんどん充ちあふれていくのと同様である。仮にも、この四つの芽生えを拡充していけば、仁義礼智はあまねく行われるようになり、天下国家をも安らかに治め、保持するには十分なものとなる。しかし、仮にも、これらを放っておけば、それは手近な父母への孝行一つでさえ、満足にできるようにはならないのである。

5月

2日 誠は天の道なり

身に誠なるに道あり。善に明かならざれば、其の身に誠ならず。是の故に誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり。

（離婁上十二章）

【訳】 身を誠にするには方法がある。それは、善（道理にかなうこととかなわないこと、正しいことと間違っていること）を理解することで、それができなければ、とても我が身を誠にすることはできない。このように、誠こそは（本性からのもので）天の道であり、全ての根本である。（この本性である）誠を十分に発揮して完全なものとすることこそ、人の人たる道である。

7月

29日 人不善あるなく水下らざることあるなし

人の性の善なるは、猶ほ水の下きに就くがごとし。人不善あるなく水下らざることあるなし。

（告子上二章）

【訳】 人の本性が善であることは、ちょうど水が低い方へ流れるようなものである。だから、人間の本性には不善なものはなく、水も低い方へ流れて行かないものはない。

7月

31日 仁・義

仁は内なり、外に非ざるなり。義は外なり、内に非ざるなり。

（告子上四章）

【訳】（告子がいった）「仁は人間の心の中に内在するもので、決して外から押しつけられたものではない。義は物事を判断して適宜対処していくのだから、自分以外の外的条件によるもので、決して心の中に内在するものではない」と。

○松陰は、「仁と義は同じく心の中から生ずるもので、対象によって、名前がちがうだけである。つまり、父子の間では仁といい、君臣の間では義という。いずれも、同じ一つの心からでたものである」と記している。

5月

3日 至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり

至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり。

（離婁上十二章）

【訳】 至誠（まごころ）を尽くして天下を感動させないものはない。

○松陰は、「誠とは、その智と行とが、意志を用いなくても自然に誠そのものであるということであり、誠を思うとは、その智と行とが誠でありたいと思うことである」と記している。

〔川口註――松陰が最後の江戸行の際、この言葉を松下村塾の門下生に書き残し、また、『護身の符』としたことは有名である。〕

7月

30日 生之れを性と謂ふ

生之れを性と謂ふ。

（告子上三章）

【訳】（告子がいった）「もって生まれたままのものが人間の本性である」と。

○松陰は、告子のいう「性は猶ほ杞柳のごとし」、「性は猶ほ湍水のごとし」及びこの「生之れを性と謂ふ」について、朱子の註の一部を取り上げ、「これらの意味するところは、人の本性は善、不善の区別があるということではなく、どちらもすることができるということである。朱子が『生之れを性と謂ふ』という言葉について、これが告子の間違いの根本であると説いているのは、非常にすぐれた意見である。人が性善であるという意義を理解するには、精緻な思索が必要である」と記している。

8月

30日 天爵を修めて、人爵之れに従ふ ①

天爵なるものあり、人爵なるものあり。仁義忠信、善を楽しみて倦まず、此れ天爵なり。公卿大夫、此れ人爵なり。（告子上十六章）

【訳】天から授かる爵位である天爵というものがある。人から与えられる人爵というものがある。仁・義・忠・信の四徳や善を楽しんで倦まない実践力は天爵である。公卿などの爵位は人爵である。

〔川口註—松陰が「講義テーマ」として抽出した部分だけでは十分に理解ができないと思われるので、その前後部を追加した。31日も同様。〕

10月

14日 豪傑—文王なしと雖も猶ほ興る

文王を待ちて而る後に興る者は凡民なり。夫の豪傑の士の若きは文王なしと雖も猶ほ興る。（尽心上十章）

【訳】（周の）文王のような聖人の教化を受けて初めて発憤して立ち上がるのは、平凡な人間である。世に豪傑と称されるほどの人物は、たとえ文王の教化がなくても、みずから進んで立ち上がるものである。

○松陰は、「この言葉により、凡民と豪傑との区別を明白に知ることができる。豪傑とは、何事も自分の力で作り出し、他者の足跡を踏もうとしないものである」と記している。

2月

22日 仁は天の尊爵なり

夫れ仁は天の尊爵なり。人の安宅なり。之れを禦むることなくして不仁なるは、是れ不智なり。（公孫丑上七章）

【訳】そもそも仁は天から授けられた何よりも尊い爵位である。人が安心して住むことのできる家でもある。（ここに居着くことについて誰も邪魔などしないのに）自分から居着くことをせず、わざわざ（不安定な住まいである）不仁に居着いていることは、智者のすることではない。

8月

31日 天爵を修めて、人爵之れに従ふ ②

古の人は其の天爵を修めて、人爵之れに従ふ。今の人は其の天爵を修めて以て人爵を要む。既に人爵を得て而して其の天爵を棄つるは、則ち惑へるの甚しきものなり。終に亦必ず亡はんのみ。（告子上十六章）

【訳】昔の人は天爵を修めて、その結果、人爵がついてきた。今の人達は人爵を手に入れるための手段として天爵を修めている。そしていったん人爵を手にすれば、天爵の方は捨てて顧みようともしない。実に考えちがいも甚だしい。そんなことでは、せっかく手に入れた人爵までもいずれ失うことであろう。

天將降大任於是人也。
必先苦其心志。
勞其筋骨。
餓其體膚。
空乏其身行。
拂亂其所為。

2月

23日 君子は人と善を為すより大なるはなし

これを人より取りて以て善を為すは、是れ人と善を為す者なり。故に君子は人と善を為すより大なるはなし。（公孫丑上八章）

【訳】他者の善を取り入れて行うのが、人民とともに善をなすということである。だから、君子にとって、天下の人民とともに善を行うということより大きな楽しみはない。

12月

29日 天の将に大任を ①

舜は畎畝の中より発り、傅説は版築の間より挙げられ、膠鬲は魚塩の中より挙げられ、管夷吾は士より挙げられ、孫叔敖は海より挙げられ、百里奚は市より挙げらる。（告子下十五章）

【訳】舜は田畑を耕す農夫をしていたところ、堯から引き上げられ天子となり、傅説は道路工事の人夫から登用されて総理大臣となり、膠鬲は魚や塩の商人から見いだされ、管夷吾は武士から宰相となり、孫叔敖は海辺の貧しい生活から宰相となり、百里奚は市井の民から宰相となった。

12月

31日 天の将に大任を ③

人恒に過ちて然る後に能く改め、心に困しみ、慮に衡はりて、而る後に作り、色に徵し声に発して、而る後に喻る。入りては則ち法家払士なく、出でては則ち敵国外患なきものは国恒に亡ぶ。然る後に憂患に生じ安楽に死するを知るなり。（告子下十五章）

【訳】人間というものは、失敗をした後によく悔い改め、心に苦しみ、思案に行き詰まり、悩み抜いてこそ、初めて発憤して立ち上がり、その煩悶や苦悩が顔色にもあらわれ、うめき声となって出てくるようになってこそ、初めて心に悟るものである。国家も同様で、内に代々法度を守る譜代の家臣や君主を補佐する賢者がなく、また、外には対抗する国や外国からの脅威がない時には（おのずから安佚に流れ、ついには）、必ず滅亡するものである。（以上のことを考えてみれば、個人にせよ、国家にせよ）憂患の中にあってこそ、初めて生き抜くことができ、安楽に耽れば、必ず死を招くということが分かるのである。

○松陰は、「この章は我が師佐久間象山先生が、江戸伝馬町獄で一日に一度、必ず誦読されたものである。先生は、『掘り出されたままの玉が磨かれて連城という名玉となり、剛鉄が鍛えられて名刻の士将となったのである。そのためには非常に苦しい琢磨や洗礪を受けるのである』ということを例に引かれ、御自身がこの十年来、海防の問題に苦労し、ついにはそのために獄に入れられることとなったことを述べられ、『これもつまりは天が大任を自分に降そうと考えられてのことである。今後はいよいよ益々我が身を磨き鍛え上げて、天の心に応えねばならない』という意味のことを記しておられた。大体、天が人に才能を与えることは多いが、その才能を完成させるということが難しい。天が才能を与えるとは、あたかも、春夏に草木の花や葉っぱが深く茂るようなものである。しかし、桃や李は、秋冬の霜や雪にあえば、皆枯れ落ちてしまう。ただ、松や柏だけはそれと異なり、雪の中でも益々青々とその翠をたたえている。才能が完成するとは、この雪中の松柏の姿のようなものである。人間の才能もこれと同じである。世の中には、年若く気鋭く、その能力が豊かで喜ぶべき者も多く存在する。しかし、人生の艱難困苦を経るにつれて、そのすぐれた気性が廃れ、結局、一俗物になってしまう者も少なくない。ただ、そのうちにあって、真の志士だけがその艱難困苦に対処して奮い立ち、ついにその才能を完成するのである。私は才能のない者ではあるが、象山先生の教えを受けた者である。桃や李の仲間になって、松や柏に笑われるようなことはできない。まさに我が身を磨き鍛え上げて、連城や干将とならなければならない。以上が、私の本章に対する所感である」と記している。

12月

30日 天の将に大任を ②

故に天の将に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を労せしめ、其の体膚を飢ゑしめ、其の身を空乏にし、行其の為す所に払乱す。心を動かし性を忍び、其の能くせざる所を曾益せしむる所以なり。（告子下十五章）

【訳】だから、天が重大な任務をある人に与えようとする時は、必ずまずその人の心や志を苦しませ、筋骨を疲れさせ、餓え苦しませ、生活を窮乏させ、全て意図とは反対の苦境に立たせる。これは、その人を発憤させ、性格を辛抱強くさせ、できなかったこともできるようにするためである。

回戸雅

至誠而不動者
未之有也

吾學問廿年齢亦而
立然未能解斯一語
今茲關左之行願以
身驗之若乃死生大
事姑置焉己未五月

二十一回猛士

至誠にして動かざる者未だこれあらざるなり。
吾れ学問二十年、齢も亦而立なり。然れども未だ斯の
一語を解することを能はず。今茲に関左の行、願はくば身を
以てこれを験さん。乃ち死生の大事の若きは、姑くこれを置く、
己未五月　二十一回猛士